

或教授の退職の辞

西田幾多郎

青空文庫

これは楽友館の給仕が話したのを誰かが書いたものらしい、
 而もそれは大分以前のことであろう。

初夏の或晩、楽友館の広間に、皓々^{こうこう}と電燈がかがやいて、多くの人々が集った。この頃よくある停年教授の慰労会が催されるのらしい。もう暑苦しいといつてよい頃であつたが、それでも開け放された窓のカーテンが風を孕^{はら}んで、涼しげにも見えた。久しぶりにて遇つた人もあるらしい。一団の人々がここかしこに卓を囲んで何だか話し合つていた。やがて宴が始まつてデザート・コースに入るや、停年教授の前に坐つていた一教授が立つて、明晰なる口調で慰労の辞を述べた。停年教授はと見ていると、彼は見掛によらぬ羞^{はに}かみやと見えて、立つて何だか謝辞らしいことを述べたが、口籠つてよく分らなかつた。宴が終つて、誰もかれも打ち寛いだ頃、彼は前の謝辞があまりに簡単に済まなかつたとも思つたか、また立つて彼の生涯の回顧らしいことを話し始めた。

私は今日を以て私の何十年の公生涯を終つたのである。私は近頃ラムの『エッセー・オブ・エリヤ』を取り出して、「老朽者」という一文を読んだ。そしてそれが如何にもよく

私の今日の心持を言い表しおるものだと痛く同感した。回顧すれば、私の生涯は極めて簡単なものであった。その前半は黒板を前にして坐した、その後半は黒板を後にして立った。黒板に向つて一回転をなしたといえ、それで私の伝記は尽きるのである。しかし明日ストーヴに焼べられる一本の草にも、それ相応の来歴があり、思出がなければならぬ。平凡なる私の如きものも六十年の生涯を回顧して、^{うた}転た水の流と人の行末という如き感慨に堪えない。私は北国の一寒村に生れた。子供の時は村の小学校に通うて、父母の膝下で砂原の松林の中を遊び暮した。十三、四歳の時、小姉に連れられて金沢に出て、師範学校に入った。村では小学校の先生程の学者はない、私は先生の学校に入ったのである。然るに幸か不幸か私は重いチブスに^{かか}罹つて一年程学校を休んだ。その中、追々世の中のことも分かるようになったので、私は師範学校をやめて専門学校に入った。専門学校が第四高等学校と改まると共に、四高の学生となったのである。四高では私にも将来の専門を決定すべき時期が来た。そして多くの青年が迷う如く私もこの問題に迷うた。特に数学に入るか哲学に入るかは、私には決し難い問題であった。尊敬していた或先生からは、数学に入るように勧められた。哲学には論理的能力のみならず、詩人的想像力が必要である、そういう能力があるか否かは分らないといわれるのである。理においてはいかにも当然である、

私もそれを否定するだけの自信も有ち得なかつた。しかしそれに關らず私は何となく乾燥無味な数学に一生を托する気にもなれなかつた。自己の能力を疑いつつも、遂に哲学に定めてしまった。四高の学生時代というのは、私の生涯において最も愉快な時期であつた。青年の客気に任せて豪放不羈ふき、何の顧慮する所もなく振舞うた。その結果、半途にして学校を退くようになった。当時思うよう、学問は必ずしも独学にて成し遂げられないことあるまい、むしろ学校の羈絆きはんを脱して自由に読書するに如くはないと。終日家居して読書した。然るに未だ一年をも経ない中に、眼を疾やんで医師から読書を禁ぜられるようになった。遂にまた節を屈して東京に出て、文科大学の選科に入った。当時の選科生というものゝは惨みじめなものであつた、私は何だか人生の落伍者となつたように感じた。学校を卒おえてからすぐ田舎の中学校に行つた。それから暫く山口の高等学校にいたが、遂に四高の独語教師となつて十年の歳月を過した。金沢にいた十年間は私の心身共にさかん壯な、人生の最もよき時であつた。多少書を読み思索にも耽つた私には、時に研究の便宜と自由とを願わないうこともなかつたが、一旦かかる境遇に置かれた私には、それ以上の境遇は一場の夢としか思えなかつた。然るに歳漸く不惑に入った頃、如何なる風の吹き廻しにや、友人の推すい輓ばんによつてこの大学に来るようになった。来た頃は留学中の或教授の留守居というのであつ

たが、遂にここに留まることとなり、烏兔^{うとそうそう}忽々いつしか二十年近くの年月を過すに至った。近來はしばしば、家庭の不幸に遇い、心身共に銷磨^{しょうま}して、成すべきことも成さず、尽すべきことも尽さなかつた。今日、諸君のこの厚意に対して、心窃^{ひそか}に忸怩^{じくじ}たらざるを得ない。幼時に読んだ英語読本の中に「墓場」と題する一文があり、何の墓を見ても、よき夫、よき妻、よき子と書いてある、悪しき人々は何処に葬られているのであろうかという如きことがあつたと記憶する。諸君も屍^{むちう}に鞭^{むちう}たないという寛大の心を以て、すべての私の過去を容^{ゆる}してもらいたい。

彼はこういうようなことを話して座に復した。集れる人々の中には、彼のつまらない生涯を臆面もなくだくだくと述べ立てたのに対して、嫌気を催したのもあつたであろう、心窃に苦笑したのもあつたかも知れない。しかし凹字形に並べられたテーブルに、彼を中心として暫く昔話が続けられた。その中、彼は明日遠くへ行かねばならぬというので、早く帰った。多くの人々は彼を玄関に見送った。彼は心地よげに街頭の闇の中に消え去った。(昭和三年十二月)

青空文庫情報

底本：「続思索と体験『続思索と体験』以後」岩波文庫、岩波書店

1980（昭和55）年10月16日第1刷発行

底本の親本：「西田幾多郎全集第十二巻」岩波書店

1950（昭和25）年

初出：「思想 第八十三号」

1929（昭和4）年4月

入力：ms

校正：土屋隆

2006年3月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

或教授の退職の辞

西田幾多郎

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>